日暮らし

一

「恋煩いには、ちと早いというものです」と、幸庵先生は言った。

井筒平四郎はばたばたと団扇を使いながら、縁側で大あぐらをかいていた。なにしろ暑い。まともにお天道さまを見上げるとくらくらするほどである。平四郎は本来、夏の暑さが好きで、これまで夏負けなどしたことがないのだが、さすがに歳のせいだろうか、今年はぐったりとしおれている。

十日も前から、ずっとこんな具合の日照り続きなのだからかなわない。細君は、こういうときには蜆汁に限ると言って、毎日のようにこしらえては平四郎に勧める。

「蜆は滋養があるから夏負けいたしませんし、蜆汁を飲んでおけば、流れる汁が目にしみませんのよ」

どういう理屈でそうなるのかと問えば、なぜかは知らないがとにかく昔からそういうことになっているのだと言い張る。それで平四郎も日々おとなしく蜆汁をすすり、豆粒のような小さな貝の身をちくちくと突っつき出しては食しているのだが、暑さが身に応えることには一向に変わりがないようである。これならば、蜆に祟られて鼻先から貝殻でも生えてこないうちに、鰻に切り替えたい。

それだというのに――

「先生、あんた暑くないのかね」と、平四郎よりたっぷり二十歳は年上のはずだ。この暑さではきっとへろへろになっていることだろうと出迎えたのに、先ほどから汗を拭うでもなく実に涼し気な風情である。この先生は、医者によくあるつるつる頭ではなく総髪だし、医者におきまりの浅葱色の薄い衣の上に十徳を重ねて着ている。で、座布団の上にちょこなんと座り、先ほど細君が、小女を走らせてわざわざ買ってこさせた固練りの甘酒をすすりながら、澄ました顔だ。単衣の着流しの前を大きくくつろげ、裾をまくりあげて、それでもまだ暑がっている平四郎とは、暦の違う場所で生きているかのようである。

「夏は暑いものですよ」と、町医者は応じた。

「それだからこそ、めりはりがあるのです。暑いときには暑いように暑がって過ごす。それがいちばん身体にはよろしい。しかし、最前からお顔を見ていると、井筒さまは少々暑がり過ぎのようですな」

本道（内科）も外科もよくする先生で、平四郎のぎっくり腰も手際よく治してくれたことのある、なかなかの良医だ。治療の際にはけっこう豪快な口もきく。今日のところは丁寧に構えているのは、診療ではなく他の用向きで訪ねてきたからだろう。

本所元町に住む岡っ引きの政五郎のところに呼ばれた帰り道だ――という。それを聞いて、平四郎は最初、大親分の茂七の具合が悪くなったのかと思った。〝回向院の親分〟と呼ばれて、親しまれ恐れられ、長いあいだこの本所深川一帯に睨みをきかせてきたあの茂七も、米寿を迎えての、この猛暑だ、暑気あたりでも起こしたかと思ったのである。

ところが、話を開いてみれば大はずれ、茂七大親分はピンピンしているという。寝込んでいるのは政五郎の手下のおでこで、枕もあがらない様子だというから驚いた。

四、五日前から、まったく飯を食わないのだという。この暑さで箸が進まないというのではない。飯の一粒さえも口に入れないのだ。心配した政五郎のかみさんがあれこれとかまってみても、あいすみません、ご飯は要りませんと謝るだけで、食べ物には一切手をつけない。水ばかり飲んでいる。そうして最初の二日ほどは、いつものように家のなかでこまこまと立ち働いていたが、三日目の朝にはさすがに目を回してひっくり返ってしまい、以来、寝ついているのだというのである。

おでこというのは十三歳の男の子で、親からもらった名前は三太郎という。つるりとした可愛い顔の子だが、額が異様に広い。おでこだ。またこのおでこさんは異様に物覚えが良い。だから、茂七大親分から昔話のあれこれを開き、それを子細に覚えておくことを大事な役目と担って政五

郎のもとにいる。

もう一年ばかり前の詰になるだろうか。岡っ引き嫌いだった親父殿の後を継ぎ、岡っ引きというものを抱えたことのなかった平四郎だが、ある一件をきっかけに、政五郎と繋がりができた。そのとき、おでことも知り合った。自分が生まれるよりも前の出来事の詳細や人の名前を、書いたものでも読み上げるようにすらすらと諳んじてみせるこの子の特技に、平四郎は心底感嘆したものである。

突出したその特技を除けてしまえば、素直で行儀の良い子だ。元来そういう性質なのだろう、男の子にしては少々やわかと思うほどにおとなしい。憎まれ口のひとつも叩くわけでもないし、余計なおしゃべりなど一切しない。だから平四郎も、おでこの親はどこでどうしているのか、彼がいつから、なぜ政五郎のもとで暮らすことになったのか、深い事情を知る機会は、これまでなかった。

やはり寂しい身の上だったのだろうな――と、ぼんやり想像したことがあるばかりである。

だが、政五郎は彼の親分であると同時に親代わりだし、政五郎の女房もおでこを実の子のように可愛がっている。傍目で見る限り、本所元町での今のおでこの暮らしに、飯が喉を通らなくなって寝込んでしまうほどの辛いことや悲しいことがあるようには、とうてい思われない。

実際、政五郎夫婦もわけがわからなくて困り果てているそうである。だから幸庵先生を呼んだのだ。

こんなものは病ではないと、先生はすぐに見立てた。もともと華奢な身体つきだったおでこは、

飯を食わないせいでさらにひと回り小さくなっていた。が、それ以外にはこれという悪いところは見当たらない。腹に水が溜まっているわけでもなし、心の臓が酔っぱらったうさぎのように飛び跳ねているわけでもない。肌の色が黄色くなっていることもないし、目玉はちゃんと動くし小水も出る。熱もないし脈もとくとくと普通に打っている。

「人は、飯を食わないと死ぬのだよ。おまえもそれくらいのことはわかっているだろう。ならば、死にたいから飯を食わないのかね？」

幸庵先生が尋ねると、おでこはすっかり尖(とが)ってしまった顎(あご)を薄い夜着(よぎ)のなかに隠して、今にも泣きそうな顔をしたという。

「死にたいならば、飯を絶つなどというまどろっこしいやり方より、もっと確実に手っ取り早く死ねる方法を、私はいろいろ知っている。場合によっては、それを無料(ただ)で教えてやってもいい。どうだね、おまえは死にたいのか死にたくないのか」

あまり医者らしい台詞(せりふ)ではない。

すると、おでこは尋ねた。「先生、人は死ぬとどうなりますか」

幸庵先生は答えた。「私はまだ死んだことがないからわからん」

正直と言えば正直である。

「だが、おまえの場合は、死んだらどうなるか、はっきりわかる」

「どうなりますか」

「迷惑になる」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。